

10月31日(日)・大会2日目 10:40~12:10 (組織論レビュー【12】会場) (90分)

●組織論レビュー セッション【12】

「組織ルーティン概念の変遷と今後の展望」

\* 吉野直人 (西南学院大学 商学部 准教授)

\* 代表報告者

[ 概要 ]

組織ルーティンは古くからある組織論のコアな概念の一つであり、今さら検討する余地などないように思われるかもしれない。しかし 2000 年以降に概念定義におけるパラダイムシフトが起きてからは、ルーティン研究という領域が確立されるほどまでに議論が活発化している。

契機となったのは、フェルドマン(Martha S. Feldman)とペントランド(Brian T. Pentland)が提唱したルーティンの遂行性を強調する二重性モデルである。

そこで本セッションでは、まず理論的起源とされるカーネギー学派から概念定義の変遷を辿ることで、二重性モデルが提唱された理論的背景を整理する。さらにその後の展開として、二重性モデルを精緻化してルーティンをナラティブとして捉えた最新の研究動向を概観する。

最後に、ルーティン概念の刷新から派生する新たな理論的および方法論的課題を展望する。

[ 参加者へのメッセージ ]

本セッションでは幅広い聴衆を想定しています。ルーティン研究に関心を持たれている方はもちろん、組織学習、イノベーション、ダイナミック・ケイパビリティなど、ルーティンを分析単位とした組織現象に関心を持たれている方にもご参加いただければと思います。

ルーティン概念の刷新は、対象となる組織現象の説明原理を変えるほどのインパクトを持つと考えられるためです。また、概念定義をめぐる紆余曲折は、構造化理論、実践理論、アクター・ネットワーク理論、批判的实在論といった社会理論とともに歩んできた道でもあります。

したがって、組織論とメタ理論の関係に関心がある方にも何らかの示唆があるのではないかと考えています。